
arch the rainbow

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a r c h t h e r a i n b o w

【Nコード】

N 9 4 8 8 L

【作者名】

A K I R A

【あらすじ】

いつでも俺にはサッカーがあった。

泣きたい時も、笑いたい時も、いつでもそばにサッカーがあった。馬鹿な俺はサッカーの神様に愛されているとさえ思ってしまった。でもそれは、勘違いだったのかもしれない。

プロローグ（前書き）

・人生はサッカーであり、サッカーこそが人生。

by マラドーナ（元アルゼンチン代表）

プロローグ

「マイボール！」

「ボー！　ボー！」

「パス！　早く」

いろんな人の声が響き渡るフィールド。その中では一つのボールを奪い合っていた。

実力が均衡するチーム同士の試合のためか、どちらもゴールが中々奪えずにいた。そんな試合をしてる最中、俺は出番を待ち、ストレッチを入念にする。

すると突然、俺は監督に呼ばれ、その声に反応して俺は監督の方へと向かった。

途中、同じように出番を待っている仲間に肩を叩かれる。

「頑張ってこいよ！」

「期待してるぜ！」

そんな短い言葉が心地いい。俺は、はい、と短く答える。

監督のところまで行くと、やはり選手交代のようだ。もちろん俺が出る。

ピッチ内の審判に声をかけ、丁度ボールが外に出たのをきっかけに、試合を止め交代を指示された選手を外に出るように促す。

俺は出ていくチームメイトとタッチをする。すると出て行くチームメイトは息も絶え絶えに俺に声をかけてくれる。

「後は…、任せた…」

その声からは悔しさが滲み出ていた。表情を見なくても分かるくらいに。ただ俺は、はい、と答える事しか出来なかった。そして思いを受け止めた俺はピッチに足を踏み出す。

——ドクンッ

瞬間、心臓が高鳴り、体中を駆け巡る血液が沸き立つような感覚が襲う。

足が思うように動かない。心臓の鼓動も休まる事を忘れたようだ。このままではいけない。そんな事を思えば思うほど、思うように動けなくなっていく。

「大丈夫か？」

そんな声がしてくる。

「やってやろうぜ！ 隼ちゃん！」

また他の奴が声をかけてくる。

不思議とその声が聞こえてくると、体の緊張が解れてくる。

仲間の声が俺を一人じゃないと教えてくれて、不安が無くなっていく。

「はい！」

心の底から出した声は、思いのほか大きな声となった。

相手選手の困惑したざわつきと、仲間達の笑い声が聞こえてくる。俺は少し恥ずかしくなった。

――でも、もう大丈夫。

審判が笛を鳴らし、試合が再開される。

途中からの出場だから、俺に残された時間は少ない。それだけは残念だ。

でも今はこうやってサッカーが出来る事が嬉しい。

すると俺の足元にボールが早速転がってくる。同時に迫ってくる相手の選手の声や気配も感じた。

――邪魔するなよ。今俺は嬉しいんだ。

でも俺はそんな事気に留めず、ボールを止めて指示を待つ。

「隼！ そのまま！」

声が聞こえすぐに足を振り上げる。そしてそれをそのまま声のする方に振りぬいた。

ボールは気持ちのいい音を立てて飛んでいく。

1 s t l e g (前書き)

・サッカーの神様は、いつも少しだけ僕に優しい。

b y ロナウド（元ブラジル代表）

1st leg

寒さが身にしみる冬空の下で、俺や仲間達の心は熱く燃えていた。

1月も1週間程過ぎたこの日、俺たちの姿は国立競技場にあった。電光掲示板に映し出されているスコアは『2－0』。俺らの高校が勝っていて、時間も残す所ロスタイムのみとなっていた。

スコアや残りの時間上普通ならこれ以上の攻撃はペースを乱しかねないと思い、安全な戦略で戦う所だろう。

――普通なら、か。

だけど俺たちの戦い方を見れば、きっとそんな思いは無いと分かるだろう。

その言葉を象徴するように、自分が考えたことに自分で嘲笑してしまいながら、今現在ボールを持っていた俺は相手のゴールに向かいシュートを蹴りこんでいく。

相手の選手達には疲労や困惑が手に取るように分かるほど動きが鈍い。

ここまで来たのに負けてしまうなんて…、そんな事を思っている事だろう。自分だったらそう思うはずだ。俺はそのままゴール前へ走っていく。自分達の中で誰かがこぼれ玉を拾ってくれているはず、そう思いながら。

その思い通り上がってきていた俺たちのチームで、右サイドバックを務めている選手がこぼれ玉を拾ってサイドを駆け上がり、展開していく。守備をしている相手の選手達はウンザリとした様子でそっちの方に動きがつかれてしまう。そこで気付いたのか、ハツとした様子でゴール前を確認する相手の選手達。

もうその時には遅かった。

気付いた相手の選手達より一足早く俺がそのスペースへと入り込んでくる。その動きを信じていたのだろう、サイドバックの選手がそこにドンピシャでクロスを上げてくる。

それに向かつて誰よりも早く動き始めた俺だったが、なんとか俺の考えを読み取った相手のDFが俺のユニフォームを密かに掴んで動きを封じている。

――邪魔するなよ。

それをものともせずに進んでいく俺。相手の選手の方が引つ張られて転んでしまう始末だ。

フリーになった俺は体を少し倒しながらボレーのモーションに入りボールを迎え入れる。気持ちが良いほどに今この時がゆっくりとしたスピードで流れていく。

一度は俺の右足の甲に迎え入れられたボールは、留まる事無くすぐに離れていく。その先はハンモックのようなネットが張られているゴールだ。

ボールは誰にも触られる事無くネットに受け入れられる。忙しく動いていたボールがようやく休息についた。

一層と沸き立つスタジアムの歓声。相手のチームの応援団を除いた誰もが言葉とは思えない声を上げている。それに触発されたように俺の体は動き出す。今日は3点全てを取り、フル出場もしていて疲れているというのに動かさずにはいられなかった。

相手のチーム全員がうなだれていたり、座り込んで泣いている間を縫って走って行く俺は、飛び上がりながらガッツポーズをする。不謹慎と取られるかもしれない。それでもこの気持ちを表さずにはいられなかった。

※ ※ ※

「もう明日の試合で終わりなんだよね」

「ああ。本当の最後だ」

試合も終わり、喜びの中宿泊しているホテルに戻ってきた俺たちは、興奮冷めぬまま夜を迎えていた。

さすがに疲労をだんだんと体が訴え始め、皆が眠りにつき始める。一番騒いでいたキャプテンの吉仲が一番最初に眠りに着き、一番デカイいびきを掻いて周りに迷惑をかけていた。皆がそれで顔に落書きしていたが、明日はきつとすごい怒るだろう。そう思いながらも止めずに笑いながら見守っていた俺も、さすがに眠いと寝ようとしていた。

丁度その時、俺の携帯がメールの着信を知らせてくる。内容を見ると、

『ちょっと出てくれる？』

俺は騒ぎの中誰にも気付かれないように部屋から、そしてホテルから出て行く。行けると返事をした後に送られてきたメールに書いてあった待ち合わせ場所は、しばらく行った先にある公園。

俺を待っていたのは彼女の有紀^{ゆき}だった。大会中はここで何回も会って、試合間の何も無い日は絶対に会って話をしていた。

髪を染める事も無く、化粧もほんの少しするだけ。しかもスカートを短くしたりもしないという『清楚』と言う言葉を表しているような彼女は、中学生の時から付き合いだ。昔からずっと変わらず俺の事を見てくれている彼女は、俺の心の拠り所にもなっていた。

今日もただ他愛も無い話をするだけ。でもそれだけで俺はよかった。

「すごかったよ。今日の…、あれ…、なんて言うんだっけ？ あ…、『ハットリ君』？」

「いや、『ハットリック』。1人が3点取る事だろ？」

そうそれ！、と言いながら笑う彼女につられて俺も笑ってしまう。こうやって話しているときも、透き通るような声がとても心地よくて、いつまでも彼女の声を聞いていたいと思うほどだ。

無邪気に笑って隣にいる彼女を見て、俺は思わず抱きしめてしまった。

「きゃ！　ちょ、ちよつと。こんな所でダメだよ！」

「嫌だ。放さない」

そう言って少し体を離し困っている彼女を見て、微笑みながら顔を近づける。

一瞬触れ合うだけの口づけ。何が起きたか分からなかったのか、彼女はボーっとしている。ようやく頭が今の出来事に追いついたように、急に顔を真っ赤にして俺の胸にうずまる。

「恥ずかしいよお…」

消え入りそうなその声が、あまりにもいとおしく、俺は一層強く抱きしめる。

「でも、隼くんも心臓の音、早い…」

「そりゃあ彼女に胸を押し当てられちゃあ…」

「…ばか」

そう彼女が言って、戸惑いながら顔を俺に向けて眼を瞑る。

俺は彼女からのそうされたことで心臓がドクンと大きくなってしまふ。それでも俺は申し出をしっかりと受け止め、もう一度口づけを交し合った。

※ ※ ※

彼女と別れた後、俺は帰り道を歩きながら携帯を取り出した。耳に押し当て、聞こえてくる呼び出し音が数回聞こえた後、相手が受け取った音が聞こえてくる。

『もしもし、田中ですけど』

電話をかけた先は俺の家。出たのは俺の母さんだった。

「母さん？ 俺だけど」

『オレオレ詐欺にはかかりませんよ？』

母さんの受け答えに思わず笑ってしまう。母さんも同じように笑っていた。

『どうしたの？ こんな時間に。明日だって試合なんですよ？』

「ああ、でもちょっと電話しとうと思っ

『珍しいわ。アンタがこんな風に電話してくるなんて。やっぱりオレオレ詐欺？』

いいよそれは、と言って空を見上げながら話し続ける。

「たださ、ここまで頑張っ

父ちゃんが死んでからずっと俺のこと育ててくれて、家が大変なのに俺がサッカーで頑張りたいって言っても反対しないでやらせてくれたからここまで来れたんだし。お礼ぐらいは言いたいよ」

『…』

俺の言葉が終わっても電話の先からは何も言ってこない。それでも俺は続ける。

「ようやく3年になって全国まで来て、しかも決勝の舞台に立てる。こんな時だから言いたいよ。

あり——」

『待った』

丁度お礼が言おうとした矢先、電話の向こうから俺の言葉を制する声が聞こえてくる。若干鼻が詰まったような声だが、俺はあえて気付かないフリをする。

『お礼は後でゆっくり聞いてあげる。全部終わってからでもいいで

しょ?』

「…うん。そうだね」

そうだ。俺はまだ明日試合がある。こんな所で満足感になんか浸ってられない。それをこんな時に教えてくれる母さんはとても強い人だと思ってしまう。

『…まあ、プロにでもなって3倍返しでお願いね』

その一言が無けりゃ良いものを…。でも母さんらしくてとても嬉しい。

「大丈夫だよ。ちゃんとオフア-が来てるから。あとは明日の結果次第では5倍返しも出来るかも」

そう言って電話で笑い合う俺と母さん。やっぱり親子なんだと思ってしまう。

じゃあ、そう言って電話を切って一息を吐く。

暗い夜空の向こう、待っている明日。

その空の下で俺はどんな風になっているのか。そんな事を考えていた。

1 s t l e g (後書き)

超不定期ですので、少し目にしていただければ嬉しいです。
今度はいつになるやら。

2nd leg (前書き)

・サッカーが簡単だったことは一度もない。

by ジネディーヌ・ジダン (元フランス代表)

2nd leg

決勝戦も残り45分。

前半が終わり、『0対0』とスコアレスで折り返してしまった。再三のチャンスもなかなかモノに出来ない俺たちは、苛立ちを隠せなかった。

それと言うのも俺に馬鹿みたいに張り付いている1人のディフェンダーに、そのチャンスの芽をことごとく潰されているからだ。何度か俺に渡りそうになったボールを直前でカットしたり、ボールを持ってもファール覚悟で体を密着させてくる。実際そいつはもう1枚イエローカードを貰っている。あと1枚イエローを貰えば退場になるから、もうそこまで激しいディフェンスをしてこないと思ったのだが、変わらずに俺に付きっ切りだ。

今までも何度も激しいマークにあった事はあるが、これほどしつこいマークは初めてかもしれない。

「なんだよアイツ。サッカーは相撲じゃねえんだからあんな体寄せてくんじゃねえよ」

俺の嫌いなサッカーだった。あんなイタリア人的なサッカー、好きな奴なんているんだろうか。サッカーって言うのは綺麗なプレーをして、見る奴らを楽しませるもんじゃないか。

俺が悪態をつきながらタオルで頭を拭いていると、隣でユニフォームを脱いで体を拭いていた吉仲が笑う。

「なんだよ。何か言いたいのか？」

「いや、それもそうなんだろうなあ、って思ってな。お前は」

「？」

俺が意味が分からないといった顔をしていると、ニヤニヤする吉仲。気持ち悪いな。

すると体を拭き終わった吉仲は、冬と言うのに半袖のユニフォームを着て皆に、ちよつと聞いてくれ、と言って注目を集めた。

「隼の奴、有紀ちゃんとか抱き合いたくないみたいだから文句言ってるぞ。そりゃあ昨日あんな事までしてりゃ――」

「ちょ、待て！！」

俺は持っていたタオルを放り投げ、吉仲の口を塞ぐ。それを必死で振りほどこうと抵抗してくるものだから、声を出させまいと吉仲の首を腕で締める。

「お前寝てたろ！　なんでその事知ってるんだよ」

そう耳元で言うと、吉仲は苦しそうな声で、

「まさか丁度その時にトイレに行きたくなるなんてな。お前が出てったのを見たんで付いて行ったら…、って事よ。というかマジでギブ…、やめて……」

本気で締めていたわけじゃないが、結構首にきまっていたらしい。腕を放して開放してやる。

ああ苦しかった、と言いながら首を擦る吉仲。

「ま、さっきのはどうでもいいとして、文句は言ってる暇ねえぞ。その嫌な事も含めてあっちのサッカーなんだ。結局それを掻い潜ん

なきやゴールに辿り着きやしないんだから相手してやれよ。エースは潰される運命だ。お前の憧れ、あのロナウドも然りだったろ？」

「ん…、まあ、そうだな……」

そう言われればそうだ。ロナウドもイタリア・セリエAに行って戦って、1年目で25ゴールも入れてるんだ。守備信条の国、イタリアだ。どのチームも徹底してロナウドを止めにかかっただろう。それでもロナウドはその守備をもろともせずに挑んで、そして勝った。

今じゃメッシやC・ロナウドを好きだと言う奴が多くいるが、それでも俺はロナウドが一番だ。『超常現象』と呼ばれたプレーに心底酔ってしまった俺は、きっとその『超常現象』から抜け出せないだろう。

「お前はお前なりのプレーをすれば良いんだ。みんながお前を信じてるんだからよ。なんとかしてくれよな」

「なんとかって…、無責任な奴だな」

だってそれがお前の仕事だしな？、と笑いながら言い、バッグからスポーツドリンクを取り出して飲み干してしまう。2リットルのものをだ…。

正直この状況に燃えてきた。ロナウドみたいに出来るとは思えないけど、この状況を打開できれば、あのロナウドみたいになれるかもしれない。

「じゃあ、やってやるか」

「その意気だ。つうかお前この試合も決めれば大会全試合ゴールだ

ぜ？ 決めてくれよ」

「…え？ 何それ」

俺の気の抜けた返事にロッカールーム全体が静まり返る。

「お前…、全然知らなかったのか？ その話題でどのスポーツ番組も持ちきりなんだぞ。お前の事で話題になってるのに、本人何も知らないとかあるか、普通…」

「いや、だってゴール数なんて俺数えてないし」

俺がそう言っていると、お前らしいな、と吉仲が言って笑ったのを見て、皆が皆同じように笑い始めた。

考えてみればこの試合まで全試合ゴールを決めてきた、気がする…。

あれ、本当にそんな決めてたっけ？ 有紀も母さんも何も言っていなかったし、全然知らなかった。

…ああ、そうだ。俺だけじゃなくて2人ともそういう事に疎かったんだ。



後半が始まって前半同様、同じディフェンダーが俺に張り付いていた。相手からボールを奪ったのを見てハーフラインを越えて自陣に戻っていくのだが、そこにさえピッタリと俺に付いてくる始末。

ちょっと前に見たロナウジーニョに張り付くF・カンナヴァーロの事を思い出す。確かその試合は見事にロナウジーニョを押さえ込んだカンナヴァーロのチームが勝利を納めていたんだっけか。

「嫌な事考えるなあ、俺は」

あまりいろんな試合を知ってるのは良い事じゃないな。そう思いながらボールの行方を目で追って、そのディフェンダーと共に歩きながら少しずつ相手ゴールへと上がっていく。

俺たちの中盤もパス回しをしながらボールをしっかりと保持するも、苦戦してじりじりと前に進んでいくのがやっただ。俺だけじゃなく、俺たちの中盤も相手のしつこい守備にいつも通りのパス回しが出来ないでいた。名門高だけあって守備は統率が取れていて硬く、攻め手が見つからない。坊主頭は伊達じゃないという所だろうか。

名門の象徴なのか、相手は選手全員が坊主頭。何故そんな事をする必要があるのかは分からないが、名門高のサッカー部は決まって選手達に坊主をさせるというのが多い。いくらロナウドが好きだとしても、ロナウドみたいに坊主にだけはしたくなかった。だから今の高校を選んだって所もある。

まあ一番の理由は、強い所に行くより、強い奴らを倒す事の方が楽しいって思っていたからだ。

俺に張り付くディフェンダーに近づく。

「だったらこんな事で文句言えない…、な！」

そいつは俺からなかなか視線を外さない。だがその時、中盤で1人抜かれたのを見て、ほんの少し俺から視線が逸れた。それを見逃さず、歩いていた俺は、一気にトップスピードに乗ってディフェンダーを置き去りにした。

俺の動きを見たボール保持者は、相手のディフェンスラインの間

を切り裂くようなスルーパスを放った。スピードに乗った俺を止められる奴はいない。俺も良いタイミングで抜け出していく。

ペナルティーエリア直前でキーパーと1対1。

今日の俺は落ち着いていた。何もかもがスローモーションに見える。調子が良いときの感じだ。

キーパーを見ると、スタートが遅れたようだが飛び出してきた。シュートを打つ方にしても判断しづらいタイミングだ。するとキーパーが少し体を傾けるような動作をとった。

一度ボールを保持してもう一度見る。やはり体を横にして滑り込んでくるようだ。

俺はボールの下から少し浮かすようにチョンと蹴る。落ち着いて蹴ったそのボールは走る勢いそのままの強さでキーパーを越していく。

…と思った所で必死に伸ばしたキーパーの手にボールが触れた。それでもボールはゴールへと向かっていく。誰も追いつく事は出来ない。

でも無情にもボールはキーパーに触れた時に横回転を受けたように逸れていき、惜しくもポストに当たって外に出てしまった。俺は地面を蹴って悔しがる中、ボールに触れたキーパーが味方の選手達に、よくやった、と言われながら抱きつかれていた。

「おい、コーナーだ。ここで決めに行くぞ！」

後ろから走ってきた吉仲が叫びながらペナルティーエリアに向かってくる。

この後もコーナーキックがある。俺たちのチャンスなんだ。今は相手がピンチを防いだことでホッとしているかもしれない。

俺は後ろから来た吉仲とキッカーに近づいていく。

「ちょっといいか？ 作戦があるんだが」

呼び止めた俺に近づき、3人で輪になって話し出した。

この所、コーナーキックで得点するのは、ゴール前でコーナーから遠い位置である『ファー』と呼ばれる位置にいる吉仲が多かった。逆に近い位置の『ニア』にいる俺は、ボールをゴール方向に流し込むようなヘッドをする事が多いが、あまり決める事はない。研究熱心そうな相手の事だ。そのヘッドが上手い吉仲にマークがつく事は容易に想像が出来た。実際前半もピッタリ体を寄せられていた吉仲は、まともにヘッドを打ててなかった。

「:で、それを上手く利用するんだ」

「?」

俺の言葉に最初、頭に『?』を浮かべていた2人だが、俺の話を聞いていくうちに口元に笑みを浮かべる。

そりゃ面白いな、と言って同意する吉仲を見て、キッカーもそれに頷いて続く。

「ならやってみるか」

※ ※ ※

俺たちはいつもどおりのポジションにつく。最初は相談をしていた俺たちを怪しんでいたが、俺たちの付いたポジションを見て何も無いと思ったのか、前半同様のポジショニングを取っていた。

キッカーはゆつくりとボールをセットしながらエリア内の様子を窺う。後半始まって間もなく、スコアレスドロの状況の為か、主審も早くしろと促してくることはなかった。

ようやくボールをセットし終えたキッカーがゆつくりと手をあげる。行くぞと言う合図だ。

その合図を見た俺は、エリア外に向かい早足で歩いていく。不審に思いながら追ってくる前半からの俺へのマーク。

そしてキッカーが1歩踏み出す。瞬間、ファーにいた吉仲が俺のいなくなったニアへと走り出す。その動きを見て相手ディフェンダーがついていく。他の相手の奴らもそれに注意が向けられる。

なでしこジャパンがワールドカップ決勝で見た澤の延長同点ゴールのシーンのようだ。

「…よし」

吉仲についているディフェンダーも含め、相手の選手達は吉仲へとボールが向かってくると思っているのだろう。

その予想しているであろう相手のペナルティーエリア内へとボールが上げられた。ボールは速く高い弾道でファーへと向かっていく。俺はその落点へ向けて走りこんでいた。一旦エリア外に出た後、振り返った俺はついて来たディフェンダーと交差するようにもう一度エリア内へと進入していたのだ。

チラリと後ろを見る。ディフェンダーは迫ってきていたが、これなら追いつく前にヘディングできる。

吉仲へと注意がいったキーパーは意表を衝かれて尚、後ろに下がりがらジャンプをし、懸命に手を伸ばしてボールに触ろうとする。だがその思いも虚しくボールに触れる事が出来ず、そのまま俺へと向かってくる。

少し高くなった為、ジャンプをしながらのヘディング。しっかりとボールをおでこで受けた。後はそのボールをゴールに迎えられる

のを見送るだけだった。

それは、本当に突然の出来事だった。

「え？」

俺は不意に体制が崩れていくのを感じる。誰かが俺にぶつかってきた感触がした。

見ると追いかけてきたディフェンダーが体を当ててきたのだ。

何やってんだか。ボールはもうゴールに向かってしまったのだから、そんな事をして意味が無いと言うのに。

そう思いながらも一度ボールへと視線を向けようとする。でもそれは叶いはしなかった。

『ガンッ』

音を聞いたと同時に後頭部に痛みが走る。視界がぶれる。どうやらポストにぶつけたようだ。

そのまま俺はゴールの中へ倒れこんだ。この衝撃はさすがにヤバイ。このゴールの後は一旦ピッチを去ることになりそうだ。

そんな事を思っていた俺に影が迫っていた。視界がぼやけ、それが何かは分からない。

何も分からないまま、そこへ二度目の衝撃が…。

側頭部へハンマーでもぶつけられたような痛みと共に、俺の意識は無くなる。視界はぼやけも何もなくなり、ただ暗くなっていくだけ。そんな中俺はゴールに転がるボールが見えた。

どうやらゴールが決まったようだ。

その瞬間、俺の意識は一気に無くなっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9488/>

arch the rainbow

2011年11月17日10時26分発行